

The breast of valkyria has a generator built-in.
Her breast is very strong.
The softness is the best,
and it is very sweet and is very indecent.
We want to caress the breast.
The breast of Selvaria is beautiful and is unrivaled.
Nobody can overcome her milk tank. We love her and worship it. Forever.....

For Adult Only

VALKYRIE'S DESIRE

'Valkyria Chronicles' Selvaria Fan Book



VALKYRIE'S DESIRE

Valkyria Chronicles' Selvaria Fan Book

へへっ
こいつあ本当に
スゲエ女だ

帝国の蒼き魔女も
こうなっちゃあ
ただのメスだな



指がどんどん埋もれていくぜ

ほおおお
なんだこの乳

軍人とは言っても
所詮は牝だなあ

ムニ ムニ



おっ...おっ...ムニムニ

クク
ケツ穴もいい具合だぜ

ち
ちがっ
ああッ



VALKYRIE'S DESIRE

'Valkyria Chronicles' Selvaria Fan Book

— 墮 —

忌呪

まるで機械のように精確で、乱れのない硬質な音。

大理石の床に響く規則正しい足音は、その主の性情を何よりも雄弁に物語っているかのようだった。

気丈にして潔癖、清廉にして厳格な武人。

東ヨーロッパ帝国連合ガリア方面軍総司令官マクシミリアン・ガイウス・フォン・レギンレイヴ準皇太子の側近にして中部ガリア侵攻部隊司令官……

——セルベリア・プレス——

若干二二歳にして大佐の地位に就き、一軍を預かる将であると同時に帝国最強の個人戦力と誰もが認める彼女がギルランダイオ要塞の廊下を歩くだけで、その歩音は兵達の気を否定なく引き締めさせた。

伝説の戦闘民族ヴァルキュリア人の末裔——彼女の銀髪も、紅玉のような瞳もその証であり、見る者を魅了もすれば畏怖させもする。著き魔女の異名通り、あまりにも特異で、美しい。

現在、本国から召喚を受けているためマクシミリアンはこの要塞にはいない。セルベリアと同じくマクシミリアン麾下常勝不敗の三将軍として名を馳せたラディ・イエーガーもベルホルト・グレゴールもまた、各々の作戦遂行のために二ヶ月程顔を見せてはいなかった。

よって現在、ギルランダイオの司令官はセルベリアが代行している。周囲からすればそれはマクシミリアンから彼女への信頼の

表れであり、また彼に常に影のように付き従う絶対の護衛役でもあるセルベリアに、今回に限って本国への同行を許さなかったのも、先だつての件に対する気遣いなのだろうと、殆どの者がそう考えていた。

そう、傍目には上官からの部下に対する温かな恩情のように見えるのだ。常に冷徹な印象を受けるマクシミリアンも、忠臣中の忠臣であるセルベリアへは情を垣間見せもするのだろう、と。

しかし実際にはどうなのか。

あのマクシミリアン準皇太子が、果たして忠臣が相手とは言えないような恩情をかけるのか。おそらく、イエーガーやグレゴールは一瞬間を望めてから、やはり否定するに違いない。セルベリア自身も理解している。マクシミリアンは、駒に情をかけるような男ではない。

ではどうしてマクシミリアンはセルベリアの同行を許さず、ギルランダイオの司令代行に据えたのか。

答えは至って簡単だった。

今のセルベリアが、護衛の役に立たないと判断したためだ。

「……」

鋭利な刃物を連想させる、切れ長の瞳にはどんな感情も見取ることには出来ない。が、それでも今のセルベリアが纏っている空気は、軍神や戦乙女と呼び称えられる女傑のものではなく、寂しげな、一人の女のそれだった。

彼女の最大の不幸は、そのことに泰然と耐えられるだけの強さを持ちえてしまったことだ。

誰も見ただけでは彼女の弱さ、儚さに気付かない。気付くことが出来たとしてもグレゴールにはそこで彼女を気遣うような人間

味は無く、イエーガーが慰めようともセルベリアは頑として全てを否定するだろう。

唯一彼女の憂いを取り払ってやれるのは他の誰でもない、マクシミリアンしかないのに——そのマクシミリアンこそが彼女を曇らせている原因の一つなのだからこれはもうどうしようもない。

そして、原因の残りもう一つ——

「……ッ！」

自室へと向かって廊下を進んでいたセルベリアの、決して乱れることの無かった歩調が唐突に乱れていた。

「……はっ、……ッ、ぐ……！」

そのまま階梯を踏んで尻餅を突きそうになるのを、壁に手を突いてかろうじて堪える。

「大佐ッ!?」

「セルベリア大佐、どうなされたのですか!?」

そのような場に出くわし、驚いて声をあげた二人は要塞内を巡回していた見回りの兵士達だった。彼らは明らかに調子を崩しているセルベリアを見るや、慌てて駆け寄ってきた。

が、しかし。

「寄るな!!」

「ヒッ!?」

返ってきたのは著き魔女からの強烈な一喝だった。

戦場において数千の部隊にさえ匹敵すると言われるセルベリアの本気の一喝だ。声をかけた兵士達も数々の戦場をくぐり抜けた猛者ではあったが、彼らが腰を抜かしてしまったことを責められる者は誰もいないだろう。

それでも、彼らは勇敢だった。さらに言うならば、マクシミリ

アン率いるガリア侵攻軍にはセルベリアに憧れ、或いは恋情を胸に秘めたる兵も少なくはない。彼らもまた彼女に恋い焦がれていたものか、ともあれ尻餅を突きつつも二人はセルベリアが無事であるのか確認しようとフラフラ立ち上がった。

「し、しかし大佐！」

「顔色もよろしくないようですし、医務室へ行かれた方が……」
彼らが心底から自分の身を案じてくれているのであろう事はセルベリアにもよく分かった。

マクシミリアンに做うかのように部下に対しても冷たい印象を与えがちなセルベリアだが、その実彼女が大層な部下想いであることは一度でも戦場で指揮下に入った者なら誰もが知っていることだ。

だからこそ、セルベリアは兵達からは人望がある。先に述べた恋慕の情に加え、無敵の戦女神へ対しての畏敬、崇拜のようなものもあるが、それらを抜きにしても、純粋に一軍を率いる将として彼女は兵達に慕われていた。

だがそれでも、駄目なのだ。

「だ、大丈夫だ。……少し、立ち眩みがしたただけだ」

「はあ」

訝しむ兵士達に向かい、セルベリアは何とか姿勢を正すとその端整な面差しから表情を消し去った。元より苦痛を他者に苦痛と感じさせるのを厭う彼女だ。懸命に、現在の己の異常を悟らせないよう振る舞う。

「医務室に行く必要も、無い。……すまぬが、自室へ戻り休ませてもらう」

「いえ、それは構わないのですが……」

既に夜も遅い。司令代行としての執務時間もとうに終わっていいはずの時刻だ。むしろ働きすぎて調子を崩しているのではないかと思わず口に出しそうになるのを兵士は寸でのところで堪えた。これ以上の余計な気の回し方を良しとする相手ではないし、自室に戻って休むと言うのならそれが何よりだろう。

「……わかりました。ですが、大佐」

「どうかくれぐれもご自愛ください。我が戦場には、まだまだ戦乙女の加護が必要なのでから」

そう言うと、二人はスツと道を空けた。

「……ああ。すまない。……あ」

「ツ！ 大佐！」

歩き出した途端、つんのめりそうになったのを片方の兵士に咄嗟に支えられ、セルベリアは短く息を——まるで喘ぎ声のように、漏らしていた。

頭に、霧がかかる。

身体が震える。背中が汗でグツシヨリだ。気持ちが悪い。

そしてそれ以上に、疼く。

「や、やはり医務室か、せめて部屋まで我々が——」

「ツツ!!」

弾かれたように、セルベリアは差し伸べられた兵士の手を払いのけていた。ヴァルキュリアの力が発現しなかったのがせめてもの救いか、もしそうなら彼の手は千切れ飛んでいたかも知れない。

「そ、その……大佐、申し訳ありません。お気に障られたのでしたら……」

「い、いや！ 違う、違うのだ……違う、の、だが……」

陳謝しようとする兵士から距離をとりつつ、セルベリアはしどろもどろに言い訳をした。

彼らは何も悪くはない。

ただ、今は駄目なのだ。

（ぐ……っ、駄目だ、耐えろ、耐えねば……ふ、ああ……ンツ）

力が、抜けていく。

能面のような顔の、頬が熱を帯び紅潮していくのが嫌でもよくわかった。自身の客観的な把握能力がこの時ばかりは恨めしい。

頭を振りながら、セルベリアは自分は大丈夫だから近付かなくても良いという意思を必死に兵士達へと伝えた。これ以上彼らに近付かれると、不味いのだ。

（……くふ……う、……あっ！）

折れそうになる膝を真っ直ぐに伸ばし、震える唇を必死になつて動かす。やや乾いたそこはあくまで艶やかに、苦しい戦乙女の言葉を紡いだ。

「……本当に、大丈夫だ。少し、疲れが出てしまっているのかもしれない。……一晩休めば、おそらくは大丈夫だろう。……部屋までは、一人で行ける。お前達は、引き続き巡回を頼む。くれぐれもガリアの間者如きに、好きにさせぬように、な……っ」

言いたいことを途中何度か躓きながらもようやく全て言い終えたセルベリアは、まだ心配そうな顔をしている二人の間をすり抜けるようにして歩き出すと、早々に自室のある方へと向かい立ち去っていった。

まだ、背後から視線を感じる。

自分を見ている目。自分を案じてくれている、心配し、芳ろうとしてくれている……のと同時に、自分に女を見ている。

セルベリア・プレスだけを見つめている、目だ。

「はあ……ん、く……ふう、はあツク！」

徐々に疼きが激しくなっていく。

早鐘のような鼓動を抑えようと手で胸に触れただけで、セルベリアはビクリと全身を震わせた。

（なぜ……どうして、こんなつ）

悔しげに下唇を噛む力も弱々しい。こんな身体では、マクシミリアンに役立たずと思われてしまうのも当然だ。

ほんの数週間前の出来事。屈辱的な過去が、澁み、濁ったおぞましい記憶となって身も心も蝕んでいく。

終わっていないのだ。

あの悪夢のような数日間。目を背けたい、凌辱の日々は。

（おのれ……ガリアめッ！）

殺意が滾る。

「……ふう、くつ……は、はあ……ンツ……あ……」

自分を斯様な惨めな姿へと貶めたガリアの薄汚い連中への憎悪に身を焦がしながら、セルベリアは永遠のようにさえ感じられる自室への道を急いだ。



無敵無敗と怖れられたセルベリアがどうしてガリア公国軍にほんの一時だったとは言え捕らえられ、虜囚の憂き目に遭うようなことと相成ったのか。理由は、至極簡単なものだった。

人質——部下達の命を盾にとられたのだ。

セルベリアの個人戦力は一個中隊に匹敵……どこか実際には大隊が相手でも決して引けはとらない。条件さえ満たしていれば、旅団規模の敵軍さえ敗走させられるだろう桁外れの、まさに超常的なものだ。

そんなヴァルクキュリアの末裔である彼女を正面から打ち破ることは不可能に近い。しかし、それが単純な“セルベリア対ガリア公国軍”という図式ではなく、帝国軍対ガリア公国軍”という軍同士の戦争ともなれば、話は変わってくる。

要はセルベリアを打倒せずとも、彼女の率いる部隊を倒すことが出来れば良いのだ。

どれだけ超人的な能力を有していようとも、セルベリアとて人間である以上は食事もしれば休息も必要となる。最初から個人で戦っているのならまた話も変わってくるだろうが、あくまで部隊を率いて戦っている以上、部隊そのものを全滅させられ、戦場で孤立させられてしまえば彼女とて打つ手はなくなってしまう。

その日、今にして思えばガリア公国軍は最初からセルベリアを誘い出すかのような、ただその一点にのみ重点を置いた布陣で戦場に臨んでいたのだ。気付けなかったのは、こればかりはどうしようもなくセルベリアのミスで、彼女自身勝ち過ぎていたために驕りや慢心によって目を曇らされていたとしか言いようがない。

セルベリアの率いる部隊は主に彼女の、ヴァルクキュリアの戦闘を支援するために存在している。そのため戦車や狙撃兵を中心に、単機で突撃するセルベリアからは一定の距離をとって援護射撃を行うのが通例となっていたのだが、その日はガリアに誘い込まれるまま距離を空けすぎってしまった。

部隊の敗北にセルベリアが気付いた時には全てが終わっていた。退路を完全に絶たれ、三倍以上の敵軍に包囲された彼女の部隊にもはや生き延びる道はなく――あたら無駄に兵を失うよりは、とセルベリアも降伏を受け入れる以外になかった。

別に命など惜しくはない。部下達を見捨て、死ぬまで戦い続ける事も出来たのだ。

それをしなかったのは、セルベリア自身がまだマクシミリアンから死んでよしと命じられていなかったせいでもあり、またこれまで幾つもの戦場を共に駆け抜け、彼女を慕い無茶な作戦にもついてきてくれた部下達を自分のミスが原因で犬死にさせたくはなかったからでもあった。

結果、セルベリアは捕虜となった。

国境付近の、それも元より交通の便が悪かったところに丁度長雨が止んだばかりだったせいもあり、セルベリアはガリア本国へすぐさま連行されることはなく、暫くの間部下共々付近の基地や野営地を転々としながら囚われの身となった。

その間、彼女が味わったのは、ただ、ただ凌辱の連続だった。彼女を捕らえた公国軍の部隊長は、極上の強さと美しさを兼ね備えたヴァルクユリア人を捕虜にして紳士的に振る舞うような人間ではなく、真正正銘人間の肩、ケダモノと呼んだ方がしっくりくる類の男だったのだ。

昼も夜もなく穴という穴を犯され、全身を隙間無く精液で汚し尽くされた数日間。

セルベリアがその高潔にして鉄壁の精神力で耐え抜こうとしても、連中が使用した薬品、殊に媚薬の類がもたらす効果はあまりにも凶悪だった。

身も心も、あらゆるものが快樂に支配されていく地獄。卑猥な言葉を狂ったように叫び、悲鳴なのか嬌声なのかわからない奇声を発しながら腰を振るってしまった悪夢の記憶。

刻み込まれてしまった凌辱の痕は、友軍の奇襲作戦によって部下共々救出されて後も決して消えることはなかった。

……今も身体を蝕む、媚薬の後遺症とともに。

「はああああんっ！」

自室に帰り着くなり、セルベリアはベッドの上に力無く倒れ伏すとその刺激だけで軽く絶頂を迎えてしまっていた。

あれからずっとこうだ。

帝国が誇る最新の医療技術を持ってしても、セルベリアに投与されたあまりに大量の薬品による症状を全て回復させるのは不可能だった。

日に何度も発作が起こり、気が狂いそうになる。

その度にこうして自室へ引き籠もっては、ベッドに倒れ込んで一時間も二時間も己が身に処置を施さなければならぬのだ。マクシミリアンに同行など、冷静に考えれば出来るはずもない。

それでも、セルベリアは悲しかった。悔しかった。情けなくて、歯を食いしばった。

なのに、止められない。

「……ふっ、む、ううううっ！」

ストッキングを脱ぎ捨て、乱暴に下着をズリ下ろしてからおもむろに秘所へと指を這わす。既にそこはグッシヨリと濡れそぼり、

僅かに指を動かすだけで湿った音が淫猥に響き渡った。

「はっ……んむ、……ふう、……ンツ！……ひううっ♥」

他に誰もいない自室であっても、セルベリアはなんと声を、物音を立てぬよう必死だった。

媚薬の後遺症によって訪れる身体の疼きは、その都度鎮めなければ精神に異常をきたすかも知れないとまで医者からは診断されていた。特にこれと言った治療薬や方法もなく、結局、こうして自分で慰める以外に方法がないのだ。

言うなれば、仕方のないことだった。

持病のようなものなのだから、諦めるしかない。そうするしかないとわかっていても……納得など、どうして出来よう。

「はひッ、いいいいいいイイツッ~~~~~」

再び、絶頂。

ベッドの上で、下半身を丸出しにした戦乙女の身体が何度も勢いよく波打つ。

情けない。恥ずかしい。死んでしまいたい。

目尻を涙で濡らし、頬を林檎のように真っ赤に染めて、セルベリアはシーツを噛んだ。

まだ足りない。ちっとも治まってくれない。なんて浅ましいのだろう。

「ふああっ、……あっ、んく！……むう、ひぐっ！んあ、ふうううんっ♥」

セルベリアも、どれだけ武勇の誉れ高かろうとも二二歳の健全な女だ。自慰行為の経験くらいは以前からあった。その時は、不敬であると頭では理解しつつもどうしてもマクシミリアンのことを思い浮かべながら切ない喘ぎを漏らしていた。

なのに今は、どうか。

「んむっ♥ ふっ、ひあああっ！ はっ、ああっ♥ ふう、ふうああ！……んっ、むう、……くふうンっ♥」

魔囚として辱めを受け、薬の後遺症で淫らに乱れる己の無様さを思えば、まさかマクシミリアンのことを思い浮かべながら指など動かせるはずもない。

秘裂を指でなぞり、そこから膣内に侵入させて激しく掻き混ぜたかと思えば、今度は皮を剥いた陰核を擦り、抓み、弄り回す。

キモチ良い。キモチ良いのに、晴れない。あまりにも食欲に、肉体は快感を求め続ける。

「はっ、ひう、はああああンツ♥」

また、達してしまふ。

頭に浮かぶのは、あの時の記憶だ。悪夢のような凌辱の、怒りと憎しみしか湧いてこないはずのものだ。なのに、その映像が途切れない。脳内で、ずっと再生され続けている。マクシミリアンを想ってする時よりも遥かに激しく、強く、狂おしく、淫らに、指が動いてしまう。悶えてしまう。……感じて、しまふ。

「なん、で……なんでえ……ひぐっ！……はっ、あああっ♥」

セルベリアは、完全に没頭してしまっていた。湧けんばかりの快楽に身を振り、臨目もふらず、周囲に気を配ることすら忘れて。

もともと、自室なのだからそれは仕方のないことではあった。普段なら鍵が閉まっただけで当然だったし、誰も入ってくることはないはずだったのだから。

セルベリアは気付かない。自分が、鍵をかけ忘れていたことに。

自分の様子がおかしかったことを見回りの兵士から聞いて、直属の部下達が心配し部屋を訪ねて来てくれたことになど、気付い



ていられる余裕は全く、欠片も無かった。

鍵の掛かっている体調不良の上官の部屋。中から聞こえてくるのは苦しそうな声。

二人の兵士——セルベリアの直属の部下であり、先の件ではやむなく人質にされてしまった者達の中の二人——は、大慌てで敬愛する上官の部屋の扉を開けた。

尊敬と同時に、命を救われた恩義がある。自分達のせいで虜囚の屈辱を味わわせてしまったという負い目も、ある。

兎角、セルベリア・プレスという女性は、彼らにとつてあまりにも特別な存在だった。

その彼女が、苦しんでいるかも知れないのだ。病によるものか、戦場で負った傷によるためか。

「大佐ッ!? どうされたのです、セルベリア大佐!」

返事は無い。ただ、苦しげな喘ぎだけが聞こえ続けていた。となればとるべき行動は一つだ。

「くっ、失礼します!」

上官の、それも女性の部屋への無断侵入など普段の彼らなら何があるかと決して行わなかっただろう。それ程までに、二人は必死だったのだ。

……不幸なのは、彼らがまだ年若く、女を抱いた経験もないような、少年兵と呼んでも差し支えない年齢だった事だ。

もし女というものを彼らがよく知っていたなら、上官の部屋から聞こえてくるのが苦痛によるものではなくもつと別の、快感に

よつてもたらされる類のものだと気付くことは充分出来たに違いないのだ。

ならば、どうして彼らを責められるだろうか。

「大佐! 大丈夫ですか!」

「今すぐ医務室へ……っ……!」

「ひああああああんツ♥ イクツ、またイクううううツ♥」

勢いよく飛び散った潮が数滴、二人の顔に付着していた。

扉を開けたままの姿勢で固まっていた二人は、自分達が目になっている状況が果たして何を意味しているのか全くわからなかった。まさに、茫然自失だ。

二人は、動けない。

セルベリアもまた、動かない。

視線だけは互いの姿をしっかりと凝視しながら、両者はどれだけの間そうしていただろう。

「……きつ——」

——貴様達、ここで何をしているのだ——と。叱責と尋問の言葉は、そこから先へは続かなかつた。

「ひやううっ!」

電流だった。

頭のでっぺんから爪先まで一気に駆け抜けた電流がそのまま今度は股間に集束し、セルベリアはまるで眼の奥で強烈な火花が散らされたかのような感覚に陥っていた。

過去最大級の疼きがどうしてこのような時に、と。セルベリア

ことなど、絶対に認めたくはないのに。

それでも、セルベリアは戦士であるが故に……自身の状態を悲しいくらい正確に把握出来てしまうのだ。

壊れてしまう。

認めても、認めなくても。

かつてのセルベリア・プレスには、戻れない。そんな確信めいた予感が、涙となって頬を伝った。

「もうっ、私……私はああ……っ！」

長い髪を振り乱し、潮の飛沫を撒き散らしながらセルベリアはベッドの上で大きく仰け反っていた。

「はおっ♥ んっ、ふうううあっ……んっ……ひううううッ♥

ま、また、またイッて……見られているのに、あっ、あああッ」

「は……あ」

「大佐……う、あ」

年若い男二人の荒い息遣いが耳に入り込み、鼓膜に絡みついてくるかのようだった。彼らの興奮が手に取るようにわかる。そうしてわかればわかる程に、セルベリアもまた昂ぶっていく。

「……っ……っ……ッ!」

危険な波が、くる。

本能的にそれを感じ取ったセルベリアは何とか事前に備えようと四肢に力を込めた……つもりだった。

けれどそんな力、どこにも残されてはいなかったのだ。

「……っ……っ……あ——ひう、イッ——」

まばたきすら出来ずにいる部下達の視線に貫かれながら、セルベリアはこれまで以上に大きく背を反らせ、獣のように絶叫していた。

「ヒイイグウウウウウウッ!? はひっ、ヒッ、ひゃへえええええああああああああッ♥」

もう駄目だ。

駄目だ。駄目だ。

崩壊する。バラバラに砕け散って、暗い真夜中の海に呑み込まれていく。引きずり込まれ、海底へと……奈落の底へと、沈む。

二度と浮き上がるなど出来ない。セルベリアに残された道はただ一つ。沈んだ先で、全く新しいセルベリア・プレスになる以外に無いのだ。

「……は、あ……うう……ふ、ああ……ッ♥」

紅玉の光が鈍い。

トロンと眠たげに開けられた眼が小さく振るえ、長い睫毛がブルブルと揺れる。

これから先の自らの運命を受け入れるかのように、セルベリアは小さく微笑すら浮かべていた。



「——と、そう言うわけだ。……すまなかつたな、無様なところを見せて」

乱れた衣を正しながら最後に謝罪の言葉を述べ、セルベリアは呆然としたままの二人を一瞥した。

説明は、至極簡単なものだった。

元々セルベリアは寡黙な女だ。囚われていた時に何があったの

か、その結果自分が現在どういった症状にあるのかだけを簡潔に部下達に伝え終わったとみるや、これ以上は何も無いとでも言いたげにフツと息を吐いて気怠い身体を動かし彼らに背を向けた。

別に今さら責任の所在を彼らに求めるつもりはない。人質さえなければ蒼き魔女がみすみスガリアに囚われることなど無かったと言ってしまうばそうかも知れないが、しかしあの時あある以外の選択肢が果たしてあったのかと問われれば、セルベリアは迷うことなく首を横に振るだろう。

それでも、何もかも割り切れてしまう程セルベリアも強くはない。マクシミリアンの剣となつて、一軍人として生き、死ぬ覚悟は無論あるが、それでも……女としての自分を完全に捨て去ることもまた、出来なかつたのだから。肉欲の赴くままに指を動かし、快楽に負けてしまった事実は変えられない。

背中越しに部下達の動揺が伝わってくる。軽蔑、されただろうか。されても仕方ないとは言え、理由を説明する以外にはどうにもしようがない。口八丁の言い訳など、自分のような無骨者にはそれこそ無理だ。

「……」
沈黙が続いた。

このままではいつまた発作が起こるかも知からない。彼らには悪いが、この事はなるべく他言無用と言い含め出ていって貰おうとセルベリアが振り向いた、その時だった。

「まさか……大佐が……」
「そのような目に……クソツ、ガリアの豚野郎ども、なんて薄汚い真似を！」

「……あッ」

二人の若者は、上官を軽蔑するどころか義憤に駆られて拳を固く握り締めていた。掌に爪が喰い込み、その部分が痛々しく赤色に染まっている。

捕虜に薬を——しかも、仮にも一軍を率いる将である者に後々まで後遺症が残る危険な薬品を投与するなど、彼らの若く健全な精神には信じられないことだった。

あの時、セルベリアへの人質として彼らは狭苦しいテントなどにまとめて閉じ込められていたのだが、まさか上官がそのような非道に遭っているとは思わなかつたのだ。

「すみません……すみませんでした、大佐あッ！」

「我々が、不甲斐ないばかりに大佐をそのような……くそお！」

二人の中に湧き上がっているのは、たまたた純粋な怒りだった。

この二人も他に洩れず、セルベリアの強さと美しさに憧れ、報われぬ想いを抱いていたクチだ。兵士として、何より男として、ガリアのやり口は到底許せる事ではない。

「大佐！ 自分達は、確かに無力です。先日のように、大佐を助けるどころか足手纏いに……」

「ですがッ、ですが自分達は！ 自分達はガリアを……ッ!!」

歯を食いしばってそう訴える若者達の姿に、セルベリアは胸の奥が温かくなるのを感じた。

ヴァルキュリア人の末裔として、幼い頃は非人道的な実験の数々にさらされ、マクシミリアンに拾われるまではまともな人間の扱いなど受けたことはなかった。マクシミリアンの忠実な部下、帝国の蒼き魔女として戦場に立つようになってからも、敵軍は当然ながら、味方から向けられる視線の多くにもやはり人外を見る恐れが含まれていた。

けれど、彼らは違う。

彼らは自分を一人の人間として見てくれている。それどころか、まるで我が事のように怒りに震え、眼に涙さえ浮かべて……

(……んっ、あ……っ)

温かだった胸が、今度は熱く、ドクンと跳ねた。

おかしい。

確かに発作が起こる間隔は一定でなくまちまちだったが、こんなに短かったことは今までに無かった。けれどこの症状は、間違いない……そうだ。

(……うっ、……ダ、ダメ、だ……ふううんっ♡)

「……っ……っ」

呼吸が荒い。すぐ目の前にいる二人に再度の異常を悟られないようするためにセルベリアは必死だった。

自分のために本気で怒ってくれた彼らに、これ以上の醜態は見せたくない。

……それなのに。

(な、なんだっ、これは!?)

鼓動が、いつの間にか早鐘のように高鳴っていた。

身体中が熱い。自慰の時よりも、彼らに見られていた事に気付いた時よりもなお、全身が湯気でも上りそうなくらいに火照っていた。自分の熱で火傷してしまいそうだった。

ヴァルキュリアの力を発動させた時とも、違う。感覚としては媚薬の発作に限りなく近いはずなのに、けれど力の発動と錯覚してしまいそうなお、近しい何かがあった。

その何かが、わからない。

「……くっ、……ふ、あ……ッ」

「大佐ッ!」

「だ、大丈夫ですか!」

眩暈がして、倒れそうになったのを二人が支えてくれた。

その瞬間――

「ひうううぐっ!」

電流だ。

また、あの電流だ。全身を駆け巡り、最後には股間へと集束して……今度は、さらにその続きがあった。

「はぐうううううんっ♡」

股間から、臍道を抜け、子宮への――直撃だった。

凄まじい衝撃に身体が何度も跳ねる。跳ね回った挙げ句、ついには爆ぜてしまいそうだった。それ程までに子宮が疼き、欲しているのだ。媚薬に狂い、男達の精を浴びて喘ぎ狂っていた時の比ではない。

(なんだ、どうしてこのような……うっ、あ……ッ!)

原因は、今の自分を支えてくれている腕だ。

セルベリアよりもさらに幾つも若いであろう、まだ少年と呼んで差し支えない年齢の部下達。自慰と、そして絶頂の瞬間を見られてしまった時からずっと感じていた彼らの視線が、近い。

(あ、ああ……お前達……)

自分を慕い、純粹な想いをぶつけてくる彼らの熱が直接子宮へと突き抜けてきたとしか考えられなかった。

「……はあ……んっ……く、……ゴク、……」

後から後から溢れてくる唾液を呑み込み、セルベリアはどうしているのか戸惑っている二人の顔を見上げた。

まだ幼さの残る、白く細い顔立ちは精悍とはとても呼べず、む

しる可愛らしくさえあった。

なのに、そんな二人に自分は今何を感じているのか。いったい、何を求めようとしているのか。

「大佐、やはり医務室へ……」

「いやっ、医務官を呼んで——」

「待て！」

慌て、医務官を呼びに行こうとした部下を呼び止め、セルベリアはもう一度唾液を呑み込んだ。ゴクリ、という音が頭の中でいやに大きく響く。

「……構わん。医務官を呼んだところで、どうにかなる類のものではない」

どうして彼らを呼び止めてしまったのか、今やセルベリアにも理解出来ていた。熱に浮かされたせいだけとは言いがたい。望んでいるのだ。

自分を支えてくれている、この腕を。

「ですが大佐、苦しそうなお姿の大佐を見るのは、忍びないので。せめて何か……」

「もし自分達に出来ることがあれば何なりと命じてください。我々には、そのくらいしか……」

涙に濡れたセルベリアの紅い瞳が、爛々と輝いていた。

妖しい光だ。まさに魔女の持つ紅玉の輝きに魅入られたかのよう、二人は言葉途中で微動だに出来なくなっていた。

「そうか……すまんな。貴様達のその言葉、ありがたく思ふ」

セルベリアの唇が小さく笑みを形作ったかと思うと、ペロリと、赤い舌が覗いていた。

あまりにも妖艶な仕草に、少年達は先程のセルベリアと同じよ

うにゴクリと喉を鳴らしていた。

奇妙な緊張感が室内を満たしていた。口の中は唾液が溢れてきているのに、唇がやけに乾く気がしてセルベリアは二度、三度と舌で舐め回した。その仕草が、年若い二人を感わせる。

……そう。感わせているのだ。

（……私は、今から……彼らを……彼らに）

心臓が脈打つたびに、大きな胸が震えた。

欲しいのだ。

子宮の疼きが止められない。そこに直接刺激が欲しい。彼らの温もりを注ぎ込んで欲しい。

「……何でも」

その先を口にすれば、もう引き返せないだろう。

今度こそ、セルベリア・プレスは落ちる。落ちたが最後、這い上がることは決して出来ない奈落の底まで。

けれど……

「何でもすると、そう言ってくれたな」

ゴクリ、と背筋を直接濡れた手でなぞられたかのような感触にセルベリアはわなないた。

自らの両肩を抱き締めたい衝動を堪え、部下達の返答を待つ。

「は、はい。……もし、我々に出来ることであれば」

「大佐のためなら、何だって……っ」

彼らの本気が伝わってきて、セルベリアは赤く染まった頬を妖しく歪ませると胸元に手を伸ばした。

「大佐ッ!?」

「いったい何をっ!?」

驚くのも無理はない。二人が見ている前で、セルベリアは唐突

に胸元をほだけさせたかと思うと、そのたわわな乳房を惜しげもなくまろび出させたのだから。

「……フ、フ」

母親以外の女の胸など見たこともないのだろう。注がれる若い視線に、セルベリアは脳が沸騰したかのような錯覚した。

だがまだだ。本当に沸騰するのは、これからだ。脳だけでなく、身体中が沸き立ち、蕩けてしまうまで。

「……なんでも、してくれるのだろうか？」

魔女の言葉には、抗いがたい強制力がある。

今のセルベリアは、正真正銘の魔女だった。

考えるよりも先に頷いていた二人へと、病的なまでに白い指を伸ばす。その先には、指など比べものにならないくらいに太く、雄々しい膨らみがあった。

興奮しているのだ。自分の胸と、仕草を見て。その事実がセルベリアの中で喜びの淫火を煌々と燃え上がらせる。

子宮の疼きが一層激しくなっていた。けれど、もうすぐ止まるに違いない。

墮ちた戦乙女の指が、ゆっくりと迫り……やがて、届いた。



熱情に突き動かされるままひたすらに食ることの快感は、一度タガが外れてしまえば後は病みつきになりそうだった。

「んっ♥ ……はあ、む、……フ、フフ」

「あっ、ああっ！ 大佐あ……くっ」

「……どうした？ そんなに……キモチ、良いのか？」

部下の喘ぎ声が耳に心地よい。

先程、コトを始める前に彼らが正真正銘童貞で、女を知らない事は確認済みだった。つまり、自分が彼らにとつて初めての女となるのだ。彼らは初めての女に散々蹂躪されようとしているのだという事実に酔い、セルベリアは悦び喘いだ。

「ふ、ん……はあ、……聞くまでも……なかったか。随分と、キモチ、良さそうではないか♥」

一方的な凌辱という被虐によって肉の悦びを知った自分が、今度はこのにも加虐的に年下の部下を責めて悦に浸っているのだから、業の深いものだ。苦笑し、セルベリアは両側から乳房を圧迫する手に力を込めた。途端、挟まれていた肉棒が大きく震え、魂切るような悲鳴があがる。

「は、はハイイッ!? つ、き、気持ち、いいですう……」

「ふっ、ううん……は、ああ……ンふうッ♥ ……確か、バイズリと言うのだったか。……不思議な、感覚だな。強制的にやらされていた時とは……ん、む……まるで、違う……んんあっ♥」

十代も半ばをまだ過ぎたばかりの幼い肉棒は、あの目自分を犯したモノとは全てにおいて勝手が違っていた。当然と言えば当然なのだが、まだ未使用のそれは見た目には醜い男性器であるはずなのに初々しく、いつまでも見つめていたくなる。

「ンッ……ふ、ふ……、こうして、挟んで扱っていると……自分の胸の間から……は、あ……ン……ベニスが顔を出しているのは、なかなか壯観だ……ふ、くうっ♥ ……皮は、かむっているがな」

セルベリアの一言に傷ついたのか、見上げるとそこには随分と



情気た幼い顔があった。

「……そう、拗ねるな。ン、フフ……これも、なかなか……はあふっ、うう……可愛い、モノだぞ？ ……それに」

「ヒイアアアッ!?」

突然の強烈な刺激に震え、引けそうになった肉棒を放すまいぞとセルベリアはさらに強く挟み込んだ。

「そう、暴れるな……せっかく、皮を剥いてやろうというのだから、私に任せておけ……♥」

「あつ、うう、ああああ……大佐あ」

呻き悶える部下を、しかしセルベリアは逃がさない。彼女の乳房は、まるで快樂の万力だった。逃げられないくらい強く圧迫されているはずなのに、それでも言語に絶する程気持ち良い。

しかも、彼女はその乳房をグツと下方にずらすことによって、

「んぐっ、あああああつ!!」

「フフフ……そおら、剥けてきたぞっ♥」

かぶっていた皮を、パイズリだけで剥いてしまったのだ。

「大佐ッ！ 大佐ダメですっ、ダメ……んうううあつ!!」

まさに剥きたての、桃色の亀頭がピクピクと震えていた。その先端で尿道口が息苦しそうに開閉しているのを見て、セルベリアが舌なめずりする。

「何が、ダメ……なんだ？ ……貴様のペニスは、こんなにキモチ良さそうにしているではないか。上官に、あろうことか胸で皮を剥かれて……どうなんだ？ んっ？」

「そ、そんな、だつてそれは大佐が——はああああつ!?」

「……抗弁は許さんぞ？ ……だから、これは罰だ♥」

まるで蛇のように。

チロチロと、赤い舌先が尿道口を、抉る。

「いぎっ!? あ、あああああああああつ!!」

瞬間、彼の肉竿を熱い奔流が駆け上ってくるのを、セルベリアは隙間無く密着した乳房に伝わる感触で察知していた。

もうすぐ、射精するのだ。

自分が、凌辱されるのではなく自分から男を、それもまだ童貞の、少年のような部下をパイズリで責め、尿道口を舌でほじって射精させようとしているのだ。

そう考えただけで、セルベリアはたまらない背徳感で全身を小刻みに震えさせた。

「はっ、はあああ♥ いい、ぞ？ 射精したいのだろうか？ 私の胸で、舌で、ペニスを……、童貞のチンポを、……こんな風に、

弄くられてっ」

「いいうううっ!? た、だい、さあああアッ!!」

「ザーメンを、プチまけたいんだ……ろう？ ……な、あつ♥」

「が、あああああつ!?」

淫乱、という言葉が頭を過ぎった。

凌辱の最中、自分から腰を振り始めてしまった際にガリアの連中から口汚く浴びせかけられた、侮蔑の言葉。なのに今、自分は淫乱だと思う。素直に、淫乱として肉棒を射精に導き、精液を顔で、胸で、口で受け止めてやりたいと思うのだ。

「フフ、……ふう、……はっ、ははあああ♥ んちゅっ、レロ、ペロペロんちゅる、ンむう、ちゅるっ、んぶう、はむ、ジュルううおのおおくくくッ♥」

「いぎっ!? だ、い……さ……じ、自分、は……あ……」

それでも、彼は必死に耐えていた。敬愛する上官を自らの精液

で汚したくないと考えているのか……もしそうならとんだ思い違いをしたものだ。

セルベリアは、汚されたいのだから。

若い雄の精液を浴びて、飲んで、渴きを潤し、満たしたいのだから。それ故に乳房も、舌も、激しさを増す一方だ。

「ふうっ、ンツくふ、……ンンっ、は、ははっ！……い、いいから……イけ！早く、イッて……熱い、ザーメンを……射精、……してしまえ！」

もうこれ以上の我慢は不可能だと叫ぶかのように、グイッと。まるでもぎ取らんばかりの乳圧と捻りが加えられ、それが結局は、彼へのトドメとなった。

「うが、い、いギツ、いぐうああああアアッ!!」

「あっ、ああああっ、はあああああんっ♥」
噴き出していく。

やや黄色がかった、濃厚な精液が。いったいどれだけ我慢していたものか、これでは火山の噴火のようだ。この凄まじい勢いと同様に比べればヴァルクユリアの力でさえ些末なもののように感じられ、セルベリアは口元を弛めた。

その弛んだ口が、入り込んだ精液を咀嚼する。

「んふうっ、ンツ、じゆる、ジュブブ……ん、ぶああ♥ レル、レロオ……ふう、む、ングツ♥」

喉にこびりつく。

嚥下しようとするだけで一苦労だ。口内に飛び込んできた分と、口の周りに付着した分、一度に飲み干そうとすれば窒息してしまいかも知れない。

(ああ……でも、この味……匂い……たまらない……い♥)

ようやく長かった射精を終え、精根尽き果てたかのように床にへたり込んでしまった可愛い部下を見下ろしながら、今の自分にとって精液とは麻薬も同然なのだとセルベリアは思った。こうして舐め取り、呑み込めば一時的に疼きが治まり衝動が和らぐ。けれど、すぐさまより大きくなった欲求が小波を掻き消す大波のようにセルベリアを突き動かすのだ。

さらなる快楽を。

もっと精液を浴び、飲み、そして——子宮に、欲しい。

「あ……うう、大佐あ」

ふと。声が出た方を見れば、さっきから放ったらかしにされていた方がなんとも切なそうな視線を向けてきていた。まだ恥ずかしいのか、ズボンを脱いで裸になった股間を手で隠してはいるものの、完全に膨張しきった肉棒はとでもではないが隠しきれない。こちらも半ばまで皮をかぶったままの幼い肉棒ながら、脈動する血管も、震える龟头も開閉する鈴口も、そして先端からジュークジュークと大量に漏れ出している先汁までセルベリアの目にはハッキリと見えた。

「ああ……すまなかつたな。除け者にしてしまった」

謝りつつも、その実放ったらかしにしておいたのはわざとだ。

本気で快楽を食らうと決めた以上、戦術家としてのセルベリアの才は淫事においても遺憾なく發揮されていた。

最初にまずは一人だけを敗えて相手にして、その間行為を見せつけ続けることにより爆発寸前まで高まらせたもう片方の童貞の性欲は、自分をきつと心底から満足させてくれるはずだと、セルベリアは予感していた。

そして、予感が確信へと変わる。

「……ゴク……ッ」

生唾を呑み込み、セルベリアはギンギンに勃起した肉棒へと手を伸ばした。今すぐ触れて、これも胸に挟み、唇と舌で舐めしやぶり回して射精させたい。けれどそれ以上に――

（欲しい……っ！ この肉棒……まだ女を知らないベニス、……熱く、硬く、太く膨れ上がったチンポを、啜え込みたい……そうして思う様腰を振って、乱れ狂いたい……!!）

荒い息を吐きながら、セルベリアは潤んだ瞳で部下を見上げた。舌なめずりし、小さく、頷く。声をかけるところか手招きする必要もない。彼はそのまま近付いてくると、ベッドに腰を下ろし、視線に促されるまま横になった。

「……ほお」

露わになった剛直に思わず嘆息し、セルベリアは眼を輝かせた。今にも爆発しそうなソレは、表面に浮き上がらせた血管を激しく脈動させながら、まるで人間ではない別の何か――魔物のようでさえあった。

事実、魔物なのかも知れない。

肉欲を司り、女を魅了してよがり狂わせる魔物。伝説のヴァルキュリアと言えども抗う術など無い、なんとも強力で凶悪な魔物だ。皮かぶりの幼く可愛らしい見た目は、そう考えれば獲物を油断させるための擬態なのかも知れなかった。

その魔物の上に、戦乙女がスツと跨る。

「んっ……ふ、ふう……ふ、あっ♥」

「うあああっ!?」

秘裂を擦りつけただけで射精しそうになったのだろう。懸命に耐えている部下の健気さにセルベリアの中に灯る淫火が揺れ、燃

え盛る。

「スゴイ……な。お前の……モノが、私の膣内に入りたがってピクピク痙攣しているのが、わかるぞ♥ ……こんな、子供みたいなチンポなのに……挿入したい、か？ ん？」

余裕があるように演技するの今や一苦労だった。それでも、こうして接してやった方が彼らは興奮するだろうと本能的な部分でセルベリアは察知していた。事実、挿入したくて先程から眺ね回っている肉棒はまだ膨張を続けようとしている。

「ひあんっ!？」

暴れる肉棒の、先端の割れ目が陰核を摩擦しセルベリアは甲高い悲鳴をあげた。いつもは低く抑え気味な上官の、なんとも女性らしい艶のある声に剛直が力強く反り返る。

「た、大佐……もう、あ……ぐう、苦しい……、ああっ」

「ひうう、ふうあああっ!？」

挿入には至らないギリギリのところ、セルベリアは何度も何度も秘裂と肉竿とを擦り合わせた。そうする事で、どんどん、どんどん反りが大きくなっていく。

「……あ、ああ……っ」

もはや可愛らしいと言うよりも禍々しいと言った方が相応しい様相へと変じたソレを目にし、セルベリアは期待すると同時に恐れおののいた。

（あんな……凶悪に反り返ったチンポを挿入されてしまったら、私の膣内はどうなってしまうのだ!?）

想像しただけで頭がおかしくなりそうだ。

皮も満足に剥けきっていない、まだまだ幼い少年の肉棒だというのに、あの日自分を凌辱した男達の使い込まれた黒々しい逸物

よりも遙かに凶暴に見えるとは。

「あんな、あんなモノを挿入されたなら、膣壁をゴリゴリと掘り粉木のように擦られ、腹を……子宮を破られてしまうのではなにか……？　なんという……ああ、本当に、なんておぞましいチンポなのだ……っ♥」

愛液が溢れるのを、セルベリアは止められなかった。擦るたびに付着していく自身の愛液によってテラテラとイヤらしい光沢を放つ剛直を見下ろし、深々と嘆息する。

「大佐ッ！　たい、さあああっ!!」

辛抱たまらんとばかりに腰を上げ、ブリッジするような体勢で挿入しようと試みる姿は依然として可愛らしい。

「自分はっ、自分はもう……ううっ、……このままでは、おかしくなってしまいそうで……ぐっ、く、あああああっ!!」

「……んっ、んく、ふう、フ、フフ……仕方が、ないな。そこまです言われては……はあ、ンッ♥」

身を振り、どうか楽にさせてくれと全身でもって懇願してくる少年の肉棒へ、いよいよ膣口を挿入のために押し当てる。

充分以上に淫蜜で濡れそぼったソコは、處ろを埋めて欲しくてヒクヒクと妖しく蠢いていた。

「あっ、ああ……セルベリア、大佐あ……っ」

ようやく、ようやく楽になれるのか、と。少年は憧れの上官を相手に童貞を捨てられる奇跡に感動し、噎び泣きながらその瞬間を待った。

——が、しかし。

「……は、……え？」

一秒、二秒。それどころか十秒、二十秒と待ってもセルベリア

はそれ以上腰を下ろそうとはしてくれなかった。ヌチュヌチュと、膣口で龟头をくすぐるかのように軽く触れているだけだ。

「た、たい……さ？」

どうしてまだ焦らすのか。もはや快感が苦痛に変わりつつあるところで、彼はセルベリアの顔に浮かんだ笑みを、見た。

「駄目……だな。挿入れたければ、しっかりと、明瞭にその旨を上官である私に伝えなければ……ンッ♥……黙って、待ってさえいけば望む結果が訪れるだなどと……些か、考えが甘過ぎるのではないか？　そのような出来ない部下は、私の部隊には……不要、……だぞ……？　……はっ、あ……ふうンッ♥」

とうに我慢の限界を超えているのはセルベリアも同様だった。

なのに、それでも彼女はより大きな快楽を求めた。食欲に、さらなる深みを、さらなる奈落を。

ただの粘膜と粘膜を擦り合わせる肉体的な快感にとどまらず、精神においてもかつてない絶頂を味わうために。

「……さあ、……どうして欲しいのか、……言って、みる。貴様は、私に……セルベリア・プレスに、どうして、欲しいのさ？」

その望みを口にするのに果たしてどれだけの精神力を要するか、理解していればこそその言葉だった。仮にセルベリア自身に置き換えたなら、マクシミリアンを相手に己の欲求を、望みを口にする

ようなものだ。そんな事、出来るはずがない。まともな状態なら、絶対に言えるわけがない望みだった。

だからこそ強要するのだ。

まともな状態など、自制心など必要ない。ここから先、セルベリアが心から欲しているのはタガの外れた卑しい獣同士の肉の交わりだ。

互いの欲と欲をぶつけ合い、蕩け合って、人間の理性や尊厳などかなくなり捨てて淫獣となることこそを望むのだ。

そのために、待った。

永劫とも思える時間を。気が狂いそうになるのを堪えて、完全な崩壊が訪れる瞬間を。

「……はあ……はあ……ッ、……ふう……はあ」

いったいどちらの息遣いなのだろう。

ねっとりとした耳にまとまりつくような荒い呼吸。早鐘のような鼓動が重なり合い、一つずつ、枷が外れていく。

彼ら年若い兵士達にとっては、年齢差、上官と部下の関係、さらには神聖不可侵にしてガリア侵攻軍の守護神とも呼ぶべき戦女神、セルベリアと交わるなどとはや禁忌の域だ。

その禁忌を犯す言葉を、とうのセルベリア自身から望まれている。……少年の唇は、震えていた。

「大、佐……セルベリア、大佐……あ」

「さあ……言ってみろ……いや、違う、な……言って、くれ。お前が私に……何を望んでいるのか……心から願うことを、ありのままに、……フ、フフ、ふああ……っ♡」

魔法の言葉は、魔法だった。

「は、あ……い……せて……い……うっ」

「もっと、ハッキリと……」

「い、いあ……あ……い、れ……いれ、さ……さ、いい」

「ハッキリと口にしろ！……せんかつ!!」

もどかしそうにセルベリアが腰を落とす。あくまで中途に、亀頭の先端部だけを呑み込むような強烈すぎる焦らしに少年は泣きながらバクバクと口を開閉させた。

粘膜と粘膜が優しく擦れ合う。愛液と先走りどが粘着質でイヤらしい水音をたてて鼓膜を犯していく。

——もう、駄目だ。

壊れていく。禁忌もクソもない。最高の女が目の前で身悶えしながら喘いでいるのだ。髪を振り乱し、腰を回し、乳房を揺らし、垂涎しながら待っている。どうしても、明瞭に言わせたくて。

「…………させて、くだ……さい……っ」

「……まだ、聞こえん」

ならばもう、枷など必要ない。

「挿入れ……させて……、……ッ!! じ、自分のコレを、大佐のアソコに挿入れさせてくださいッ!!」

「コレやアソコでは何を言っているのかわからんぞ？ 貴様は戦場でも状況をそのように報告するのか!!」

「じっ、自分のチンポを！ 大佐のイヤらしい身体を見て、触れて、ギンギンに勃起してしまっている自分の童貞チンポをセルベリア大佐のエロマンコに挿入れさせてください！ どうか、お願いします！ どうかッ！、どう——かッ!」

ズンツ、と。

まったく、一息に。セルベリアは腰を落としていた。

「おっ♡ おおおおッ♡ おあ、あああひいひいひいひいひいああああああああああッ♡」

ただ挿入しただけ、ただそれだけなのに、セルベリアは達していた。絶頂を迎え、身体を限界まで仰け反らせながら狂気を宿した瞳で少年を見下ろし、さらなる快感を要求した。

「おあぐ、お、おとおおあがああああッ!!」

彼もまた挿入した瞬間に射精していた。禁忌としていたはずの



戦乙女の膣内、パツクリと開いた子宮口の中、奥の奥までドロドロの精液がなみなみと注がれていく。注ぎながら、童貞を失ったばかりの少年は白目を剥き、泡を吹きそうになっていた。

「ああ、……が、……ふ、お、ああ……っ」

気持ち、良すぎるのだ。

セルベリアの膣内は、それまで自慰の経験しかなかった彼の世界を一変させていた。

肉棒にまとわりつく膣壁の蠢きはソレ自体がもはや魔物だ。中に入り込んだ獲物を喰らい尽くすまで放さんとばかりにキツく締めあげ、うねり、セルベリアという女性の生命力、鼓動のリズムを伝えてくる。

「おおおおおおおっ、んっ、ふうおおおあああああつ♡ さて、いるう♡ 奥、までえ……くくくッ♡ ち、ちんぽお♡ チンポの先が、わ、私を……私の、全部をお、……犯して、いるう♡ 童貞チンポにイツ、イカされへええああああアアッ♡」

ピクンッ、と大きくセルベリアの身体が跳ねていた。

まるで釣り上げられたばかりの魚だ。汗と淫液にまみれ、室内の微かな灯りをテラテラと反射させて輝く身体は、戦乙女ではなく水の妖精を彷彿とさせた。

「た、たいさの、ナカ、あ……す、すご……すこ、すぎますうあああああッ！ く、ぐヒッ!? いとお、あああああ」

「お、お前のチンポもおすごイイいいひいいいんッ♡ 童貞のお皮かぶりチンポスゴ過ぎるううふおおアアッ♡ コスられるズリズリってコスられているう♡ わ、私の膣内ア♡ オマンコオクまで童貞チンポ届いてしまってるう♡ いヒイイんッ!? お、おおおあああ♡ つ、……突き上げてくるたびにいく射

精エされているおお♡」

抽挿は激しく、しかしそれ以上に少年の肉棒は機能異常でも生じたのではないかとというくらいに射精を繰り返していた。

精液を放ちすぎて、陰囊のあたりがキュッと締めつけられたように痛む。それなのに止まらない。全てを吸い上げ、搾り尽くすかのようにセルベリアの膣内は時に優しく、時に乱暴に、挿入された肉棒を揉みほぐし、舐り尽くし、時には押し潰そうとさえしながら言語に絶する快感を与え続けてくるのだ。

「大佐ッ！ 大佐止まりませんッ、射精が、大佐のオマンコがキモチ良すぎてザーメン止まりません、ううアああッ!?」

「はっ、は、はああつ♡ イイぞ、止まる必要など無い、から！ 私の膣内に、子宮に、貴様のその熱くて濃いドロドロのザーメンを無くなるまで注ぎ込んでみるのだッ♡ 孕ませる気でッ、構わないからああアッ♡ お前のチンポ汁でえっ、はひっ、ひいひいイイいうううああああおおおッ♡」

こうして言葉を交わしている間にも射精は続いているのだ。

凄まじく濃い、やや黄ばんだ精液がソレ自体突き上げる肉棒をさらに肥大させたかの如くにセルベリアの内部を犯していた。

翻弄されているのはどちらか片方ではなく、双方共にだ。

童貞を喪失したばかりの少年は自分の快感を制御など出来ようはずもなく、かといってセルベリアも大勢の男達に凌辱された経験はあっても今のように身体を重ねるのとは勝手が違いすぎる。どうすればいいのかが、わからない。

だから二人は腰を振った。

さかりついた淫獣となって、肉欲に突き動かされるままに互いの身体を食い合い、数え切れない程の絶頂を繰り返す。

「ソンのほおおほおおほおおほおおっ♥ イヒイイツ、あっ、ふへえあああ〜〜〜♥ だ、ダメだ……わ、わた、しもう完全にイひふうウウツツ!? ほこ、おほおほお♥ イ、イイくまたイツてしまふうう♥ 部下のおつきさまで童貞だった子供チンポでイカされてしまふうひあああ♥ わ、私殿下のモノなのに、殿下に身も心も挿げると誓ったはずなのにいいっどうしてこんなに、こんなにキモチ良いの止められなヒイイ♥」

「ああっ、大佐なのに、あのセルベリア・ブレス大佐なのに自分のチンポで何度も何度もイツて……あぐあああっ! ヒイ!? すみませっ、大佐、またっ、また大佐の膣内に射精、射精してしまいますううっ!!」

意識は混濁。

どころか酩酊状態だ。酒に酔うかのように肉に酔っている。

セルベリアは自分の中にポツカリと空いた穴を埋めようと必死だった。失ってしまったものが何なのか、今はもう考えたくもない。考えて、現在感じているこの幸福を、めくるめく快楽による陶酔感まで失ってしまいたくはない。

もう、これでいい。

セルベリア・ブレスはこれでいい。

戦場では以前と変わりなく一騎当千の働きをしよう。マクシミリアンへの忠誠も敬愛も変わるところは何一つ無く、御方の腹心の部下たる三将の一角として立ち塞がる全ての敵を駆逐してみせようという覚悟には一抹の翳りもない。帝国の蒼き魔女、最強にして最悪のヴァルクキュリアのまま、戦い続ける。

けれどそれ以外のところ、それ以外の時、それ以外の全ては、もう自分を取り繕おうとは思わなかった。また、取り繕える自信

も無かった。

悦びを知ってしまったから。

あの日捕らえられ、味わわされた凌辱の屈辱も憤怒も、憎悪も慚愧も後悔も悲哀も全て塗り替えてしまう程の、肉と肉、粘膜で交わる悦楽を知ってしまったから。

だからもう、このまま最果てまで……行き着くのみ。

「ああっ、おほおほおひいいいいいい♥ またっ、また膨らんできたチンポ膨らんできたああアツ♥ 震えているうううビクビク震えて射精しようとしてる私の膣内にザーメン解き放って孕ませようとしているうううふああああああおほおほお♥」

押し上げられる。

噴火のような射精で、子宮を、その他の内臓ごと。

「あひっ♥ イツ、ひいいいぎいいあああああアツ♥ おおほおほおおふぐいいイイイ〜〜〜♥ イグツ、まだ、まだイグツウウウ♥」

何度達し、果て、痙攣しながら、再び腰を振るうのか。

自分達はもはやただの肉人形なのかも知れない——そんなことを考えながら、セルベリアは膣内に収まりきらず股間から溢れ出していた精液を指で掬い取り、舌で綺麗に舐め取った。

「じゅ、ん……ちゅぶ、ちゅちゅ、ずず……じゅる……っ♥」

「……はあ、ああ……大佐……あ」

仕草の淫靡さに、挿入されたままの肉棒が二度、三度と跳ねた。早くも硬さを取り戻し、再び膣内に思い切り精を放ちたいと暴れている。それが愛おしくて、セルベリアは少年の胸板に顔を寄せるとそのまま口付けし、舌を這わせながらやがて唇へと辿り着いて彼の口内を蹂躪した。

「フ、フフ……んんっ♥ ちゅっ、んぢゅ、ぢゅぶ、じゅろろ、ペロれる……はむ、ウウウンッ♥ ふう、んふっ……はあ♥」

息も絶え絶えながら、情熱的なキスへのお返しとばかりに少年の挿挿がゆっくりと再開される。

「……は、あ……もう、私は……フ、フフ」

「……大佐？」

不意に騎りを見せたセルベリアに、どうしたのですかと問いかけるべきか否か少年は逡巡した。その隙に、またも唇を奪われる。

「……なんでも、ない。ただ……そうだな」

長い銀髪が汗で肌に貼り付く。そのくすぐったさと、セルベリアの浮かべた笑みの妖艶さに少年は身震いした。

「一つ、頼みがある」

魔法の言葉に、少年は黙って頷くしか出来なかった。



室内に充滿しているのは、汗と、精臭、そして雄を惑わす芳しい雄の香気。それらが混じり合い、ギルランダイオ要塞のセルベリアの私室は狂乱と背徳の園と化していた。

まるで、淫獄の具現だ。

「……ふ、はあんっ♥」

左右から突きつけられた二本の剛直を手で扱き、正面からの一本は胸で挟みながらセルベリアは甘い吐息を漏らした。

「あっ、あああつ大佐！ 大佐ああつ!!」

荒々しい獣のような息遣いが、苦しそうな呻き声へと変わる瞬間がセルベリアはたまらなく好きだった。

「んちゅっ♥ ん、ぶああつ！ ……ふ、はあ……なんだ、イクのか？ まったく、堪え性のない奴だ♥ ……ふあむっ、ぢゅぶ、んふう、チュッ♥ レロ、ペロレロ……じゅるる、ずずずっ♥」

もはやまともに声をあげることかなわず、苦しげに身悶えている少年の顔を一瞥してからセルベリアは凄まじい勢いで口に啜えた肉棒の先を吸飲した。

「ぎひいいいいっ!? イッ、はああがあああ大佐ア!!」

「ふむうううウウンッ♥」

目の前で膨れ上がった龟头が一気に爆ぜていた。胸の谷間に挟まれた陰茎は射精後の余韻を味わうかのようにヒクヒクと小さく律動している。その度に尿道口からは残っていた精液が僅かにずつ溢れ出し、それさえも勿体ないとばかりにセルベリアはやや乱暴に舌で龟头を舐め回した。

「ふあ、ああむ……ンッ♥ ちゅる、ちゅう、ンぶ、はふうっ、ペロペロ……ズル、ズル……んんん、ング、ふっ、ふああ♥」

飲み干した精液が喉に絡む。

たった今バイズリによって絶頂を迎えた少年も、果たして何度目の射精だったか。五回はくだらないと思うが、まだまだ精液は濃厚なままだった。

今ではセルベリアの最も好きな味、好きな匂い、好きな喉越しだ。下手をすれば喉に詰まって窒息してしまうのではないかというくらい濃いのに、何度でも、どれだけ大量にでも飲み続けたくなる魔性の淫料だった。

「はあ……んぐっ、……む、ふう……ンッ♥ ……今度も、上質



な精液だったぞ。次もタツブリと……な？」

「は、はい……いいっ」

グツタリと疲れ果てながら、射精した少年は名残惜しそうに谷間から肉棒を引き抜くと、順番待ちしていた同僚に場所を譲った。

現在、室内には十人以上のセルベリアの部下達が集い、憧れの上官相手に射精する瞬間を今か今かと待ち侘びていた。ここ数日で既に見慣れた光景だ。

部下はいずれも、あの日セルベリアに対する人質として囚われた者達だった。いずれもやはり若い、少年兵が中心で、その事がセルベリアの中の妖しい加虐心を増大させていた。

「さあ……今度は貴様達だ♥」

「はあくっ！」

「大佐あアツ」

肉棒を握り締めた両の手に力を込め、セルベリアはまず最初はゆっくりと、そうして次第に抜く速度をあげていった。しかもただ陰茎を握り扱くだけではない。カリ首の部分を親指と人差し指で作った輪っかで刺激したり、時には裏筋や鈴口を爪の先で軽く突き、引っ掻くなどしては部下達の反応を見つつ的確に刺激を与えていくのだ。その手練な技は、もはや熟練の娼婦に勝るとも劣らないものだった。

「フフ……手だけで満足して、イッてしまうのか？ チンポがもう我慢出来ないと言って、泣いているぞ？ 美味そうな涙をこんなに垂らして……見ろ、指がベタベタだ♥」

「で、ですがっ、大佐の、大佐の手は……アヒイイッ!?」

「キモチッ、キモチ、良すぎて……ぐううっ！」

苦しげに快感にのたうつ少年達を見ているのは、たまらない愉

悦だった。

彼らは若い。しかもセルベリア以外に女を知らない。未成熟で、純心で、真っ直ぐな……そんな部下達を快楽に悶えさせ、悦び喘がせているのだ。

「は、はああアツ♥」

手と胸を使っているだけだというのに、セルベリアの秘所は止め処なく溢れ出す淫蜜によって大洪水といっても差し支えない状態だった。

今日はまだ女陰への挿入は誰一人として許していない。尻穴もだ。それでもセルベリアは、手と口、胸のみを使い覚えている限りで三〇回以上も精液を浴び、飲み続けていた。それらの行為だけで何度絶頂を迎えてしまったか自分でもわからない程だ。

けれど、そろそろ限界が近い。

精液の匂いと味と感触と。ジワジワと、繰り返された絶頂はあくまで前菜程度の、小さなものだ。まだセルベリアは満足などしていない。渴きは満たされず、疼きもやまず、淫火は子宮の奥で燃り続けている。

しかしそれよりも先に少年達に限界が訪れた。

「た、大佐イキますッ！」

「これ以上はッ！ ひぐううっ!？」

「自分ももう……ううああああああッ!!」

両手と、胸と。

三本の肉棒の中を、精液が駆け昇ってくるのがわかる。数え切れない程経験した、あの灼熱が弾け、降り注ぐ予兆だ。

「イ、イけっ！ 思う存分、私の手で、胸でッ！ ああああッ、ひう、ふああああああッ♥」

「き、きたああああ挿入^{挿入}ってきたああああああ♥ おおふおおおつ、ああひいいいいあああああツッ♥ チンポッ♥ チンポきたあザーメンビュルビュルはいつへ、はあひへえええええツッ!!」

腰が止まらない。

無意識のうちの痙攣なのか、それとも自分の意思で腰を振ってしまっているのかも判別出来ぬまま、セルベリアは狂った。挿入され、精液を身体の奥まで注ぎ込まれた瞬間に彼女の世界の色は一変していた。

これだ。

これを持ち望んでいたのだ。

全身を精液で汚し、雄の匂いにまみれ、肉棒の感触に喘ぎ、一方的に相手を弄びながらその実自分を昂ぶらせていったのは全てこの瞬間のため。

「大佐!」

「大佐大佐! セルベリア大佐ツ!!」

「いふウウツ!? ぐっ、ひあ、はええええあああツ♥ スゴツスゴひいいいい♥ 射精しながら突いてるチンポ汁ドバドバ注がれながら子宮突かれてう子宮直接犯されてるうううツ♥ ひはああああああツ♥」

セルベリアの言う通りだった。

ただの挿入では無い。挿入までは何の抵抗も無くすんなりといけたのに、一度入ってしまったえばその締め付け、壁の動き、熱さ、全てが極上で、至高の名器で、既に何度と無く交わった相手とは言え十代も半ばを過ぎたばかりの少年達がどうこう出来る相手ではなかったのだ。この、蒼き魔女は。

「これえええええツ♥ コレ好きななの、射精されながらチンポで

子宮のナカまでオクまで突かれるの好きイ大好きイイイツ♥
ンはああえええつ、アツ、おおつ♥ ふひいいいいおおおツ♥」

これ以上の快楽が、あるだろうか。

この世界に、これ以上キモチ良い事があるのだろうか。

きつと、無い。セルベリアには確信があった。
マクシミリアンを受けている。忠誠は変わらない。彼に想いが通じたならどんなに幸せだろうかと思う。けれどそれとは全く異なる次元で、今感じているこの絶対的な官能もまた揺るぎない一つの真実、至福の境地だった。

あの日、ガリアの連中に媚薬を打たれ、凌辱の限りを尽くされて、初めて性の快感を知った。しかしそれだけなら自分はこのまでの素晴らしい幸福感には至れなかったろう。

「はひツ♥ んひいいいはああああオオオオオツ♥ イイイイちんぽイイツちんぽ最高おおおつ♥ もつとおお! もつと身体中使つていいから身体中犯していいから全身にチンポ♥ チンポチンポチンポオオオツ♥」

今、こうして自分を抱いてくれている可愛い部下達。彼らのおかげだ。彼らと交わったことで、セルベリアは雌の悦びを心底から味わうことが出来た。

身体中に押し当てられた剛直の逞しさと、それに反する若々しい必死さが愛おしい。

愛おしくて、絶頂を迎えながらさらに達せられてしまう。

「イクツ♥ イクイク何度でもイッてしまう突かれまくって射精されまくってイッてしまう可愛い部下のチンポにまたイカされてしまいううううあああああツ♥ ぬひいいいいいいいいツ!!」

頂上がどこにあるのか、またはどこまで落ちれば底があるのか、



VALKYRIE'S DEALINE

まるで見えてこない。果てしない絶遠の彼方まで昇り詰め、深淵の奈落へと墜落していく。

「大佐ッ！ 大佐好きです大好きです大佐ああああ!!」

「自分も、自分もお慕いしております！ 愛してますウア!!」

甘い囁きではなく、獣の咆吼のような告白だった。

耳ではなく魂を震わせるような彼らの想いに、応えたい。全身全霊を尽くして、彼らを愛したいとセルベリアは思った。

「ああっ愛している私も愛している愛してらううウッ♥ お前達みんな愛してる愛してるからああアッ♥ だからもつと、もつと突いて私を貫いてえええッ♥ そうすれば私はお前達のモノだからお前達のセルベリアだからあああひいうううああアッ♥」
その言葉には力があつた。

ある種の約束、一つの盟約。マクシミリアンに捧げたのとは異なる意味での己の生命を捧げ、セルベリアは自身の涙と唾液、部下達にブチまけられた精液とによってドロドロに汚れてもなお美しい相貌に感極まった笑みを浮かべた。

これでいい。
これで自分はどこまでも昇り、墮ち、最後には完全に溶けてしまえる。

愛して、愛されて、抱いて、抱かれて。

人間として極々当たり前であるはずのことが、こんなにも素晴らしい。ヴァルキュリア人だとか、帝国の蒼き魔女だとか、あらゆる鎧を脱ぎ捨てて一匹の雌になれるのが嬉しくてたまらない。

「はあ……うっ……は、ああ」

ようやく射精し尽くしたのか、萎えてしまった肉棒が前後の穴からスルリと抜け落ちた。が、その寂しさは数秒後には新たな剛

直によってすぐさま埋め合わされる。

「アヒイイイイッ♥」

周囲を見回せば、まだまだ幾らでも自分に愛を注いでくれる肉棒があるのだ。その全てと愛し合い尽くすまで、どれだけの時間がかかるのか。

「んはあっ……ンッ♥ ……ちゅ、む……べろ……♥」
唇を舐め、息を吸う。

まだまだ先は長い。それどころか、果てなんておそらくは無いのだから。

「……フ、フフ」

愛おしい恋人達を見つめ、目を細めながら、セルベリアは終わり無き愛欲の中へ没頭していった。

「く、ふあああっ♡」

部下の剛直を受け入れた瞬間、セルベリアは至極あつさりと一度目の絶頂を迎えてしまっていた。肉棒の皮を剥き、蒸れた雄の精臭嗅ぎながらその嬉しい肉竿に舌を這わせていた時点で、既に限界寸前だったのだ。魔女の秘肉はそのまま遺精を繰り返し、啜え込んだ肉棒をキツく締めつけた。

「あっーああ、大佐ー大佐あー」

「さっ、は、ああ♡ イイ、ぞ♡」

チンポ♡挿、挿、挿♡ 届いてえ♡

♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

たまらず悲鳴を

あげながら、それでも

締めつけに耐え、懸命に腰を

振るう部下の健気さに、セルベリア

は頬を弛めた。ヴァルキユリア人である

自分を怖れることなく、一人の女として

暮らせてくれている彼女の事が愛おしく

セルベリアもまた腰を激しく上下に動かすのは

「あっ♡ もつとだー

もつと激しく♡バンッ♡

突いて！ その嬉しい

おチンポで突き上げ

てええええッ♡」

393

しかしこの水着は少し...

私にこんな恰好をさせて.....

夏だ！水着だ！セルベリア祭！！
宋天

布が少なすぎやしないか？

ま まったく何を考えて.....

んやんやん？！





そんな...強くっ

びん

びん



何を

ぬるお

ヌリ

冷たッ



びん

ローションですよ

ヌルヌルして
キモチ良いでしょう？

パンパン

♡…♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

グニグニ

グニグニ

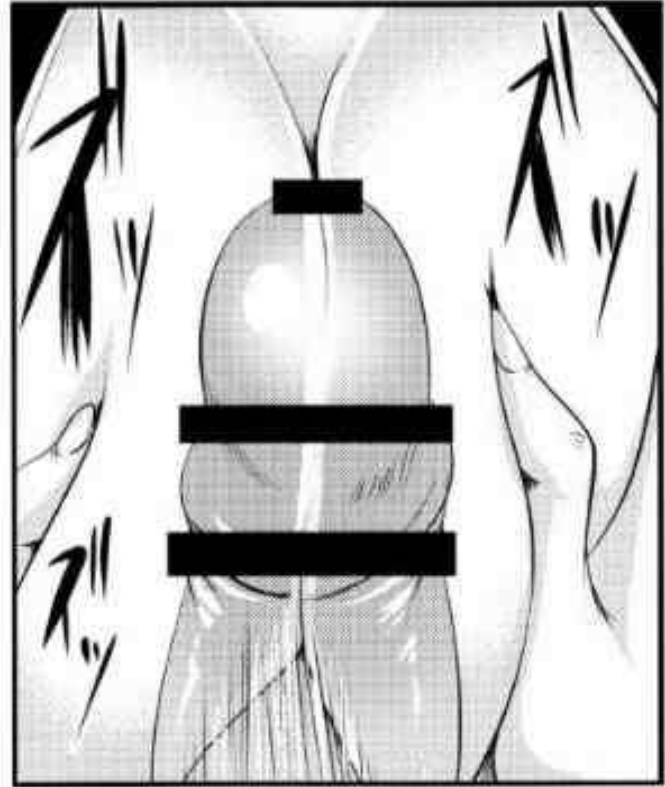
ズルズルズルズル

はぁ

まるでマンコに
突っ込んでる
みたいだあ…

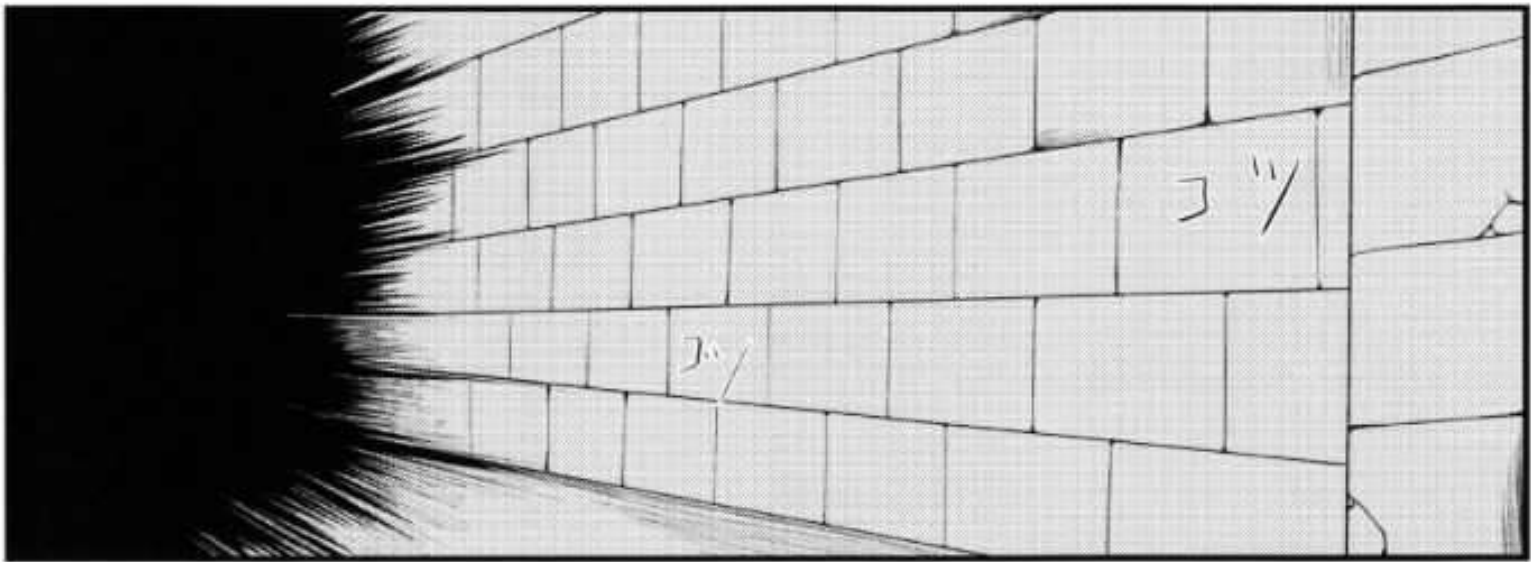
くほおおツ
たまんないですよ！

ムニィ





—淫—
寒天







ああつ……
全身を幾つもの
部下達の手が

モミ

はっ



イヤらしく這い
回つて……



ズリ

ほおおツ 大佐……あ
いつもながらすべすべで
ほんとエロいですよ……

ズリ

ズリ

ズリ



ンッ♡

…あ♡きたあ
臭い…雄のニオイ
カラダ…疼くう
…欲しいイ♡



何度見てもやっぱり
迫力満点ですよ!!

おおっ!

ほっ…さあ



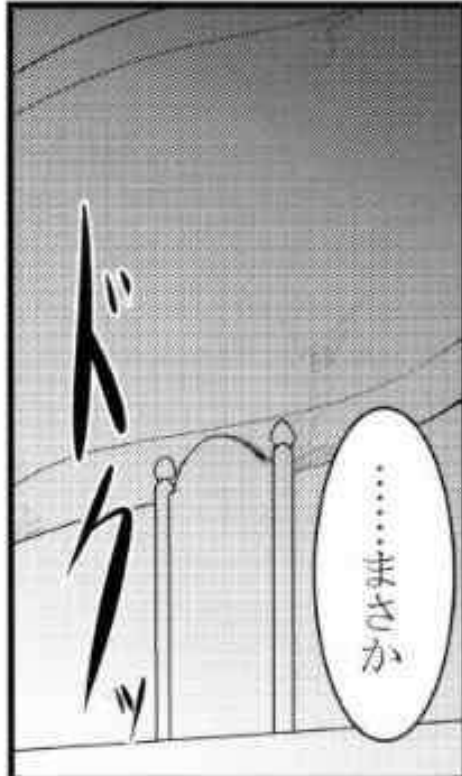
あっ♡

生臭チンポッ♡
こんなじ…っ♡

チンポお♡

臭い♡

あおっ♡







ふる♥

1688

大佐の大好きな
チンポですよ〜w

さあさあ



16R...1688♥

20

れる、



ダメ...だ もう
...堪えられなく



♡ほい

♡ぽぽぽ…♡

ちゅっ
ぽ



ぽぽ

ぽぽ

ぽ



ぽぽ…ぽ

ぽ



♡ぽぽぽ
ぽぽぽ…♡

ぽ

ココ…ダメ…なのに
……なのに
太くて 臭くて
また…
蕩けてしまう…う ♡



ホラ…あ♡



…ん



そんなに
見せつけてばかり
いないで

ズ

俺の相手も
してくださいよ

ズ



なっ 貴様
ナニを……



た
大佐ア



ビクビク
震えて……
くくるッ



そ…そんな…ア
一度に…ンシ♥

キツッ

キツッ

キツッ

ズリ

ズリ

ズリ



ズリ
ムンムン

相変わらず綺麗な色だ
…惚れ惚れしますよ

毎晩のように我々と
やりまくっているオマンコには
とても見えませんね

ハ……

それじゃ
挿入れますよ

命がけ

ビク

!!

110



濡れて いな—
「ギィィィィ!?!」



待て ツッチはまだ—



へへ…じゃあ
コッチも……



激しッ♥
そんなアア♥

いきなりい
おまおまお♥

チンポ奥までキてえ♥
ひいあああああ♥

4=2ッ



いじひんじひんじひんじひんじ
 西穴一緒に...い
 チンポで 突かれ—
 とほほほほほ♥



あほしー...
 じんじん



ふくあほあほあほあほあほ!!





大佐あ！
最高でツス！！



いいくら
なんでも

これは……



ふふふ

んん

女教師セルベリア〜イケない♡ハチミツ授業〜
宋天



……はあ

まったく 貴様らと
いう奴らは本当に……
バカじゃないのか？



大佐…もとい先生！
どうかバカな我々に

イロイロ教えて
くださあ〜い♥



先生 コレは
なんですかあ？

おやあ？ なにか
コリコリとしたものが



コッラッ！



ねえ 先生え

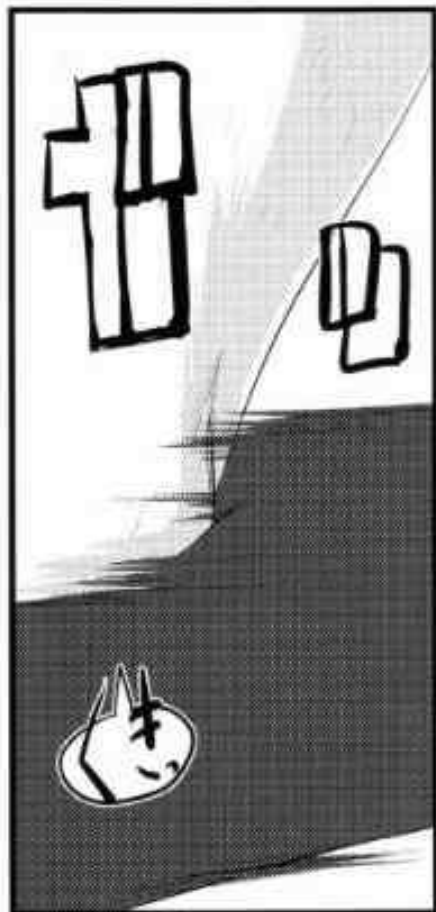
教えてくださいよお
この硬くしこってる
モノはいつたい
なんなんですか？

し…させ…ム

アハハ



乗るなッ



なんだ
もうおしまいかな？

んくうぐうッ



……フフ
先ほどまでの
威勢はどこへ
いったのだ？

あああッ

アッ



悪い生徒には
懲罰が必要だ！

罰だ！

大人しくしろ！





黑色禁星帝国
寒天示现流